

ミSSIONナル・チャーチを目指して — 真正な共同体形成への挑戦 —

杉 貴生

I. はじめに

第6回日本伝道会議（JCE6）が2016年9月27日から30日にかけて神戸コンベンションセンターで開催された。JCE6のテーマは「再生への Re-VISION ～福音・世界・可能性～」で、このテーマに沿って、主講師のクリストファー・ライト師による教会と宣教に関する4回の優れた主題講演がなされた。神中心の宣教や包括的な福音理解、それに基づく世に対する働き（ミッション）、そして教会が福音に生きる時に起こる一致と協力について力強く語られた。その講演の中核的メッセージは、宣教の民としての自覚と使命を再認識させるもので、宣教の民として生きるための励ましとチャレンジに富んだものであった¹。

教会と宣教の関係、教会の宣教的な性質やアイデンティティ等については、すでに様々な神学的議論や研究が行われており、当学会誌においても、西岡義行氏によって適切にまとめられている²。これらの学問的研鑽は宣教の現場や教会形成において実践され、具体的な実となっていかなければならない。本稿では北米の教会を中心に研究がなされ、実践が試みられているミSSIONナル・

¹ ライト師の講演については、第6回日本伝道会議実行委員会『再生へのリ・ビジョン：次の伝道会議〈2023年〉へのロードマップ』（いのちのことば社、2017年）に収録されている。

² 西岡義行「プロテスタントにおける教会と宣教の相互関係—宣教学的一考察」『福音主義神学』第38号（日本福音主義神学会、2007年）5-28頁

チャーチ (missional church) について考察し、教会形成への適用を試みる。

II. ミSSIONナル・チャーチ

1. ミSSIONナル・チャーチ対話のはじまり

MISSIONナル・チャーチについての対話や議論は、1990年代から北米を中心に様々な教派や神学的伝統を越えて盛んに行われるようになり、多数の著書も出版されている。これらのムーブメントの始まりは、レスリー・ニュービギンの著書や働きに負うところが大きい。ニュービギンはスコットランド教会（プロテスタント長老派）から派遣され、インドで約40年間、宣教師として奉仕した。彼は1974年にインドでの働きを終えて母国に帰国するのだが、そこにはかつてのキリスト教国イギリスは存在していなかった（と彼は感じた）。ニュービギンは西洋が今やキリスト教の宣教地となっていることを自覚した。彼の問題意識は福音と近代西洋文化との衝突であり、それはまず著書 *The Other Side of 1984* において論じられ³、さらに1986年に『ギリシャ人には愚かなれど』(*Foolishness to the Greeks: The Gospel and Western Culture*)、1989年に *Gospel in a Pluralistic Society* が出版され、欧米の教会に対して「西洋は回心することができるのか？」(“Can the West be converted?”) と問うたのである⁴。これらの対話は宣教論と教会論の関係を明確にするものとなり、今日MISSIONナル・チャーチとして知られているものへと発展した。

2. ミSSIONナル・チャーチとは何か

「MISSIONナル」、あるいは「MISSIONナル・チャーチ」という用語は、1998年に初めて使用されたとされている⁵。その年に出版された *Missional Church: A Vision for the Sending of the Church in North America* がMISSIONナル・チャーチの

³ Darrell L. Guder et al., ed., *Missional Church: A Vision for the Sending of the Church in North America* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1998), 3.

⁴ Craig Van Gelder, ed., *The Missional Church in Context: Helping Congregations Develop Contextual Ministry* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2007), 26-27.

⁵ Alan J. Roxburgh and M. Scott Boren, *Introducing the Missional Church: What It Is, Why It Matters, How to Become One* (Grand Rapids, MI: Baker Books, 2009), 30.

概念を初めて世に紹介した。その後、これらの言葉は特に欧米のキリスト教界で広がり、「MISSIONナル」という言葉が幅広く用いられるようになった⁶。しかしながら、MISSIONナル・チャーチの定義はその使用者によって様々である。例えば、福音を霊的消費者たちへの商品のように扱うのを拒否する教会を描写するために使う場合もあれば、教会のマーケティングや教会成長を促進する戦略のために用いることもある。また、MISSIONナル・チャーチとは個人の必要に囚われるのではなく、この世界における神の行動に焦点を合わせ直すことであるとする人たちもいれば、それを周囲の人々との出会いの機会、あるいはポストモダン文化に向けて教会を新たに作り直すこととする人たちもいる⁷。

このように各自が思い思いにこの言葉を用いている状況がある中、著書 *Missional Church* のプロジェクトメンバーのひとりであるアラン・ロクスバーグは、彼らが意図しているMISSIONナル・チャーチとは、異文化宣教を強調する教会、教会外部への働きにフォーカスしたアウトリーチプログラムを用いる教会、教会成長や教会の効率性を表すもの、効果的な伝道に関するもの、明確なMISSIONステートメントを発展させた教会、非効率的で時代遅れな教会のあり方を転換する方法、初代教会のあり方を回復させようという動き、伝統的な教会に興味を示さない人々に届くための教会の新しいかたち、等といったものではない、と述べている⁸。

MISSIONナル・チャーチとは自己矛盾的な表現ではあるが、教会に関することではない⁹。クリスチャンの間で宣教に関して議論される時、それは通常、「どうすれば未信者を信仰に導くことができるのか」、「現代に効果的な伝道方法とは何か」、「教勢を伸ばすための方策とは」、「少子高齢化で瀕死の教会をいかによみがえらせるか」、「若者を教会に根付かせるための戦略」等の事柄が話し合

⁶ 例えば、missional books, missional website, missional consultation groups, missional living, missional speakers 等である。

⁷ Todd Billings, “What Makes a Church Missional?: Freedom from cultural captivity does not mean freedom from tradition.” <https://www.christianitytoday.com/ct/2008/march/16.56.html> (accessed August 5, 2019)

⁸ Roxburgh and Boren, 31-34 参照。

⁹ Ibid., 20.

われる。これらはどれも重要なテーマであるが、すべて教会の必要に関するものである。しかし、宣教とは神のものであり、神の宣教（ミッシオ・デイ）とは宣教の主体が教会ではなく、神ご自身にあるという概念である。とはいえ、教会は宣教のための単なる道具ではないし、まして教会抜きの宣教というのは逸脱である¹⁰。宣教のない教会はもはや教会とは呼べず、同様に教会なき宣教も成り立たないのである。

「ミSSIONナル（宣教的）」という形容詞は、これまでの「教会と宣教」に関する議論に新たな枠組みを与えるものと言えるだろう。というのは、「教会と宣教」と言った場合に教会と宣教を区別し、一方が他方に優先するというのを避けられない二分法を生み出すことになるからだ。しかし、ミSSIONナル・チャーチはそれとは異なる概念へと招く。つまりそれは教会をその本質において宣教的（ミSSIONナル）なものとして見るのである。またそれはすべての文脈（コンテキスト）を宣教的な文脈として捉え、すべてのキリストの群れを宣教的な群れ、つまりその置かれた文脈において神の宣教に参与する責任があるものとして見る¹¹。

3. 神の宣教と教会の変革

宣教とは教会が主導権をもって執り行うものではなく、聖霊によってなされるものである。その聖霊は、ご自身が証人であり、この世と教会とを変えるお方、そして、教会が宣教の旅路を歩む時、常に先立って歩まれるお方である¹²。ニュービギンは「宣教とは、世界を変えるだけでなく、教会をも変革するのである。」と述べている¹³。確かに教会が神のみこころに従って変革されるのでなければ、神の宣教を担うことは困難である。宣教とは単に教会員数を増加させることでも、教勢拡大のための手段でもない。宣教とは、周囲の罪深

¹⁰ 西岡は9-10頁、16-20頁において、教会中心の宣教論への反動として教会を越えた宣教について説明している。そこでは教会自体に本質的な価値が内在しているとはみなされず、機能性において評価された。それは教会論なき宣教論である。

¹¹ Van Gelder, 27.

¹² レスリー・ニュービギン『宣教学入門』鈴木脩平訳（日本キリスト教団出版局、2010年）、97-98頁

¹³ 前掲書、102頁

い世界を変える以前に私たちが変えられなければならないという意味で犠牲を伴うものであり、そのために教会は変革されなければならないのである。

宣教は聖霊のみわざ、すなわち聖霊が主権者として働かれる。宣教における聖霊の主権者としての働きと教会の変革については、ペテロとコルネリウスの出会いの物語（使徒10章）の中で顕著に描写されている。これはコルネリウスの回心の物語というだけではなく、ペテロと教会の回心の物語でもある¹⁴。ペテロは幻の中で、律法において食することが禁じられている食物を食するように促されるが、断固として拒否する。それはこれから彼の身に起こることへの神からのメッセージであった。ペテロは律法に反して、コルネリウスから遣わされた三人のしもべたちと共に出かけることになる。それは彼に対する聖霊の強い促しによるものであった。カイサリアのコルネリウス宅では親族や親しい友人たちが集められていたが、そこでペテロは福音の物語を彼らに分ち合う。その話の途中で、聞く者たちすべてに聖霊が降った。やがて教会はこの件についてのペテロの弁明を通して、彼らが把握していなかった真理を悟ることとなる（同11:18）。この時、教会はペテロとコルネリウスが会う以前の教会とは違う種類の共同体になったのである¹⁵。もしそうでなければ福音が異邦人世界に広がっていくことはなく、キリスト教が世界的な宗教となることもなかったであろう。

4. 神の国のしるし、福音の体現としての教会

ミSSIONナルとは、神のこの世界に対するみこころに関することである。神のみこころは、罪によって傷ついた全被造世界をあがない回復することであるが、ご自身の民がその「しるし（sign）」となることを願っておられる。ゲルハルト・ローフィंकは、教会が何に召されているのかを例示するためにイスラエルを用いて次のように述べている。

旧約聖書神学の伝統におけるひとつの重要な要素の基礎となるのは、神が世界の国々の民の中からひとつの民を選ばれ、救いのしるしとされたとい

¹⁴ 前掲書、101頁

¹⁵ 前掲書、102頁

うことである。これは他の国々の民に対して神が関心を持っておられないということではない。神の民が諸国民の間でしるしとして輝く時(イザヤ 2:1-4を参照)、それらの民は神の民から学ぶであろう。彼らはイスラエルに集まり、イスラエルに参加し、イスラエルを介して、神の栄光に加わる。しかしこのすべては、イスラエルが本当に救いのしるしとして認識される時のみ起こりうる。その時、神の救いはご自身の民を認識可能で、感知できる、更には可視的なものにする¹⁶。

それゆえ救いの召しとは、罪からの救いというだけではなく、神が私たちに意図しておられる生き方へと招くものでもある。教会は世に対して、自らが宣べ伝える福音を体現する共同体となるように召されている。宣教とは、教会が行う諸活動のひとつというのではなく、教会の共同体としての具体的な営みのすべて、またその存在すべてが宣教的(ミSSIONナル)なのである。

Ⅲ. ミSSIONナル・ライフへの障壁

ミSSIONナル・チャーチ対話への道を開いたニュービギンの問題意識は、西洋近代文化の影響の下で福音が歪められ、教会が本来の使命とあるべき姿を失っているということにある。彼は、かつてキリスト教国とされていた西洋諸国がポスト・キリスト教社会となり、さらにその実態は哲学、科学、政治等の分野で反キリスト教的であるとさえ論じている。ここで興味深いことは、ニュービギンが著書の中で扱っている内容はかつてキリスト教国とされていた西洋諸国を念頭においたものであるが、日本のキリスト教会の現状にも大いに当てはまっているという点である。これはミSSIONナル・チャーチの対話や著書においても同様である。それらは西洋の教会を念頭に議論されているが、日本のキリスト教会と無関係ではない。要するに、日本はキリスト教化されることなく、すでにポスト・キリスト教文化の中に入っているということである。日本のキリスト教宣教において、いつもその障壁とされてきたのは、神道や仏教等の伝

統宗教と深いつながりのある日本の伝統文化であった。それはこの世に属し、悪の力の支配下にあると考えられてきた。とはいえ、日本の伝統文化のすべてを否定すれば日本人であることを否定することになり、それゆえ福音宣教の現場において伝統文化とどのように関わっていくべきかを慎重に検討しなければならなかった。しかし伝統文化そのものは、福音にとってそれ程脅威とはならないことが理解され始めている¹⁷。むしろ福音宣教にとって脅威となっているのは、その伝統文化の陰に隠れてあまり意識されることのなかった近代文化であった。

日本の近代化は一般的に明治維新から始まるのであるが、第二次世界大戦後、政治・経済・教育等、あらゆる分野において欧米化が進んでいった。日本に宣べ伝えられたキリスト教は、西洋近代文化の中で醸成されたもので、特に戦後に欧米の宣教団体の働きによって生まれた福音派教会の多くは、その神学や考え方において、当時の欧米の福音派教会から大きな影響を受けた。それゆえ、西洋の教会と同様の課題を日本の教会も持ちうるのである。では、それはどのようなかたちで福音宣教にとって弊害となっているのだろうか。

1. 個人主義の影響

西洋の教会から宣べ伝えられたキリスト教は、多分に個人主義の影響を受けており、そのことは共同体的な視点や共同体の重要性を欠落させている。ローフリンクがその著書『イエスと共同体』の序論の中で、1899～1900年の冬にアドルフ・ハルナックが行った歴史的な講義について議論し、その講義の一部が以下のように紹介されている。

イエスの説教において、神の国とは何を意味するのか、その訪れとは何を意味するのか、それらのことを知りたいと願うなら、イエスのたとえを読み、黙想しなければならない。そうすれば御国とはそもそも何であるかを学ぶ

¹⁶ Gerhard Lohfink, *Jesus and Community*, trans. John P. Galvin (Philadelphia: Fortress, 1984), 28.

¹⁷ ニュービギンによると、教会の第二世代や第三世代のクリスチャンにとって、古い文化はすでにその神聖性を失っているのではや脅威とはならず、むしろ神が人間に与えられた世界の一部として重んじられるようになるということだ。ニュービギン、234頁を参照。

ことができるだろう。神の国は個々人のもとに来て、彼らの魂に入っていくのであり、彼らによって把握される。神の国は実に神のご支配であるが、それは個人の心の中における聖なる神のご支配である。外面的、劇的なすべての事柄、公的で歴史的な意味のすべてはここでは消滅し、未来に対する外面的な希望もすべて消えていく。あなたが望むとおりにそれらのたとえを用いなさい。種まきのたとえ、真珠のたとえ、そして畑の中の宝物のたとえ。そのたとえにおいても、神のみことば、神ご自身がその御国である。天使や悪魔の問題ではなく、その主権や力の問題でもない。それは神の、そして魂に関する事柄である¹⁸。

ハルナックは、神の国（支配）は共同体ではなく、個人に来るとしている。個人が福音を聞き、それを受け入れるかどうかを判断する。神の支配が共同体ではなく個人においてのみ起こるので、それは内的なものにだけ影響を与え、内なる人や魂にのみ作用する。彼にとって教会とは純粋に内なるもの、目に見えないものである。また、彼にとって山上の説教は、個人の正しい意図でしかなく、教会は福音を信じる信仰によって個人的に救われた多くの人々の友愛同盟に過ぎない。福音派のクリスチャンの多くはハルナックの神学を支持してはいないが、彼と同様の個人主義的理解を持っている。個人主義は私たちの思考や生活パターンだけではなく、神学においても影響を与えている。

福音が個人的な事柄として捉えられると、福音を信じて救われても個人的・内的なレベルに留まり、それが対人関係や社会との関わりに変化や違いを生じさせるということにつながっていかない。つまり、福音を信じてはいても、具体的にその福音に生きるとはどのようなことなのか理解されず、実践もされない。したがって、このことはキリスト教倫理や弟子訓練とも大きく関わっている。

スコット・マクナイトはその著書『福音の再発見』の中で、矮小化された福音について批判的に論じている¹⁹。福音派の伝統において、福音が個人的な魂の救いということにのみフォーカスされがちだからである。死後に天国に行く

¹⁸ Lohfink, 1-2.

¹⁹ スコット・マクナイト『福音の再発見』中村佐知訳（キリスト新聞社、2013年）

ために罪が赦される、そのためだけの福音になってしまっており、ダラス・ウィラードはそれを「罪を処理するための福音」（“gospel of sin management”）と呼んでいる²⁰。そのような福音理解は、社会に対する責任ある行動やイエスの弟子としての人格的成長、生活の変革といったことにあまり影響を与えない。

2. 個人主義とキリスト教

マーク・ベーカーはその著書 *Religious No More* の中で、ホンジュラスの福音派教会の中に見られる反福音的なあり方を描写しているが、それは北米からもたらされた個人主義的・精神的キリスト教（Individualistic-Spiritualized Christianity）によるものであると強く批判している²¹。彼は、聖書は本来共同体に向けて書かれているものであるのに、それを個人主義のレンズで読むことによって聖書理解が歪められていると論じている。例えば、エペソ 2:20-22 や I コリント 3:16、17 等でパウロはクリスチャンたちに対して、あなたがたは「主にある聖なる宮」「神の御住まい」「神の宮」と呼びかけているが、それはクリスチャン個々人のことではなく、クリスチャン共同体に対して語っているのである。ところが、これらを個人的にあるいは、内的・精神的なものとして受けとめるのである。

これは個人の救いや教会における個人の役割が重要ではないということではない。イエスは個人に対して強い関心を示しておられる（例えば、サマリアの女、ニコデモ、ザアカイ等）。またパウロは教会をキリストのからだという比喻で表現し、共同体の結束を支持しているが、その中でもメンバー一人ひとりの特異性を無視してはいない（I コリント 12:12-27）。彼らは彼らがつらなる共同体に対して独自の、そして重要な貢献をしているのである。人類の罪は共同体における個性の主張ではなく、個人的な自己充足と神や仲間である人間からの独立を主張することであるとクラウスは述べている²²。それとは対照的に、

²⁰ Dallas Willard, *The Divine Conspiracy: Rediscovering Our Hidden Life in God* (San Francisco: HarperSanFrancisco, 1998), 41.

²¹ Mark D. Baker, *Religious No More: Building Communities of Grace & Freedom* (Downers Grove: InterVarsity Press, 1999), 56-71.

²² C. Norman Kraus, *The Community of the Spirit* (Scottsdale, PA: Herald Press, 1993), 43.

個性に関する聖書的概念は、相互依存や互いの関心を分かち合うことにおいて充足を求めることである²³。

多くの福音派のクリスチャンは、救いというものをほとんど排他的に個人的で、内的で、さらには神との神秘的な経験というものとして定義している。それとは対照的に、聖書は救いを「契約共同体の一員としての自己アイデンティティを発見した人間」として描写をしている²⁴。

近代の影響の中で、人間によって構築された個人主義的キリスト教は、真正なキリスト教を破壊するものである。それは神がご自身の民のために意図しておられる真の共同体の豊かな生活を経験できないようにしている。

3. 共同体の崩壊と孤立化する社会に存在する教会

ギデنزやベックは冷戦期以後の特徴的な変化として、「グローバルイゼーション」、「リスク社会化」、「脱伝統化」、「個人化」、「IT化（情報化、デジタル化）」等を挙げている²⁵。これらは日本社会のあり方を大きく変えてきたが、特に人間関係に大きな影響を与えてきたと言える。

2010年1月にNHKスペシャル「無縁社会―“無縁死”三万二千人の衝撃」が放映された時、それは文字通り大きな衝撃を日本社会に与えた。「無縁社会」という言葉は瞬く間に流行語となり、広く知られるようになった。日本は元来「有縁社会」であり、その代表的なものは、血縁・地縁・社縁という言葉で表現される伝統的な共同体で、具体的には、家族、地域社会、会社等における人間関係を指している。戦後の日本社会は、血縁・地縁・社縁を人間生活の基本において、人々がお互いに助け合う共同体意識の強い「有縁社会」であったが、それらの特色が弱まって「無縁社会」になってしまったのである²⁶。核家族化、未婚率や離婚率の増加、虐待やDV等の家庭内の諸問題により、家族の絆は弱くなってきている。都市化は町内会に代表される地域共同体のつながりを弱体

²³ Ibid., 56.

²⁴ Ibid., 53-54.

²⁵ アンソニー・ギデنز『暴走する世界』佐和隆光訳（ダイヤモンド社、2001年）、ウルリッヒ・ベック、A・ギデنز、S・ラッシュ『再帰的近代化』松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳（而立書房、1997年）を参照。

²⁶ 橘木俊詔『無縁社会の正体』（PHP研究所、2011年）、1頁

化させ、リストラ、非正規雇用といった問題は会社への帰属意識を低下させている。

伝統的共同体の衰退については、「脱伝統化」や「個人化」の影響が特に大きいと考えられる。「脱伝統化」とは、伝統や習慣の影響力が衰微していることを意味している。皆婚慣行の崩壊、選択的夫婦別姓制度の合法化に向けての動き、脱習慣的でオリジナルな結婚式や葬式の出現、様々な年中行事の変容・風化などが起きている²⁷。「個人化」は、近代の始まりとともに現れてきた現象で、「脱伝統化」と密接に連動していると指摘されている²⁸。伝統の規制力が弱まることによって、各個人は自己判断・自己決定・自己選択が可能になってきた。ギデنزは「新しい個人主義は、日常生活において伝統や慣習が衰退したことと関連している。」と述べている²⁹。これは逆も然りで、個人化が脱伝統化に寄与しているとも言えるだろう。これらの作用により、伝統的な拘束力が衰微し、伝統的な共同体の拘束力も衰退した。人々は伝統的な共同体の規制から解放されることにより、血縁・地縁・社縁的な共同体から自立して、自分自身で自らの人生を構築できるようになった。しかし一方で、深刻な「孤立化」をもたらしたのである。

こういった伝統的な共同体の束縛が弱まることは、教会共同体にとってどのような意味があるのだろうか。イエスを信じ受け入れるとは、イエスをかしらとする共同体への加入を意味する。それは既存の共同体との間に何らかの摩擦や衝突を生じさせる。特に家族が未信者の場合は受洗を反対されたり、教会との関わりを制限されることがある。肉の家族と信仰の家族のどちらを選ぶのかという二者択一を迫られることもある。因習の強い地域に住むクリスチャンにとっては、地域共同体との関係もストレスとなる。そこでは異教的な伝統行事への参加や協力を強いられる。また会社においては、過剰な会社へのコミットメントや、クリスチャンの倫理観や信仰に反することが求められることがある。このような共同体の拘束力が弱まることは、クリスチャンにとって望ましいこ

²⁷ 今枝法之『現代化する社会』（晃洋書房、2014年）、17頁

²⁸ 前掲書、20-21頁

²⁹ アンソニー・ギデنز『第三の道：効率と公正の新たな同盟』佐和隆光訳（日本経済新聞社、1999年）、71頁